



この地域で暮らす外国人にスポットを当てて、ご紹介するコーナーです。



日本でたくさんのことを 学びたい！

グルン ビノドさん
(ネパール出身)



平日の昼間は大学に通い、夕方から深夜まで某カレーチェーン店でアルバイトをしています。それ以外の時間は、たいてい日本語の勉強に充てます。机に向かいながらつつい動画サイトで日本のドラマを見てしまう時もありますが、勉強は好きです。自分の知らない知識を習得することは楽しいですし、生活の中でそれが役に立った時は、とても嬉しいのです。肉や野菜を買いによくスーパーに行きます。珍しい食材は、その場ですぐにスマートフォンで調べます。スーパーでも日本語の勉強をしています。よく作るメニューは、やっぱりカレーです(笑)。

アルバイト先のお店には、お昼になるとビジネスマンたちが大勢来店します。時間が無いのに、ちゃんと真面目に並んで待っている姿にいつも感動します。彼らはとても忙しそうで、疲れた顔をしています。お客様の貴重な時間なのであまりお話はできませんが、時々「どこから来たの？」と声を掛けられることが嬉しいです。

来日前は、先に日本で暮らす友人から、日本人はマナーが良くて優しいので、とても安全な国だと聞いていました。日本で暮らし始めてもうすぐ4年になりますが、思っ

た通りでした。以前、財布を落としたことがありますが、なんと、3日後に自宅のポストに入っていたんです！それを拾った親切な人が、身分証明書を見てわざわざ自宅に届けてくれたのだと思います。とても驚いたことを覚えています。

日本人は時間を大切にします。相手の時間を奪わぬよう、正確に時間を守ります。また、公園や道路にゴミをポイ捨てしません。このように一見、日本人には何でもないような振舞いから、実は私たち日本で暮らす外国人は多くのことを学んでいます。

私もその一人です。日本の生活の中で、日本語だけでなく多くのことを学びたいと思っています。



▲学校の友人たちと(左から3人目がビノドさん)



「こんにちは、岩田です！」

～NIC新理事長にインタビュー～

本年6月末に名古屋国際センターに着任した
岩田 隆理事長に、インタビューしました。



●今、NICについてどんな思いを持っていますか。

昭和59年の設立から34年間、NICは名古屋市と周辺地域の外国人・留学生の生活支援等で様々な実績を積みできましたが、その活動は関係団体やボランティアの方々の支えなくては語れず、これらの関係を今後も大切にしたいと考えています。

●市内に暮らす外国人の国籍別人口構成の変化とともに、ニーズも変化してきました。今後、NICはどう対応していくべきでしょうか。

平成元年に約3万5千人だった外国人人口は、今年の6月に8万人を超え、さらに多国籍になってきました。NICとして、窓口対応や事業を進める中で外国人の意見を聴取し、そのニーズをきちんと掘み、安心・快適に暮らせるようなまちづくりに反映していかなければなりません。区役所をはじめ、行政窓口での対応、地域における多文化共生のまちづくりを進めていくために、関係者や団体をつないでいくのが、NICの役目だとも思っています。

●今後、NICはどのような点に留意して事業を進めたらよいと考えますか。

各関係団体とのネットワークのなかでも、ボランティアの皆さんとのつながりはNICの一番の強み。各分野の専門家であるボランティアに支えられ、共に歩んでいくことで、NICも地域の専門家組織として存在し、成長することができます。

ただ、自らの力量を磨くのを怠り、任せきりになれば、強みは逆に弱みに転じてしまう。外国人に寄り添う組織を作っていくために、NICの力量、ノウハウをどれだけ向上させていけるかが今後の大きな課題です。さらに、新たに出てくる課題についてもアクティブに考えていく必要があります。

●読者の皆さんに向けて、一言お願いします。

ニック・ニュースを通じて様々な情報を発信しています。ぜひお読みいただき、いろいろな声を寄せていただくとありがたいです。これからも良い誌面づくりに頑張ってまいりますのでよろしくお願い致します。



～国際協力・ウクライナ/福島編～
テーマ:医療、環境
菜の花の力で再生目ざす
ウクライナ、福島の復興プロジェクト
特定非営利活動法人 チェルノブイリ救援・中部
理事 運営委員 河田 昌東さん



▲福島県南相馬市で開催された「菜の花 花見会」の様子

【被爆を経験した国として何か役に立ちたい】

ウクライナ、福島の地で原発被災者への医療支援、自立支援活動続ける、チェルノブイリ救援・中部。初期メンバーのひとり河田さんは昭和61年チェルノブイリ原発事故当時、大学で遺伝子を研究していました。「研究実験で使用していた放射能の知識がありまし、とにかく何かお役に立ちたいという気持ちでした」。

志を同じくする仲間たちと平成2年に団体を設立。医療機器、粉ミルクなどの救援物資支援を続ける傍ら、平成19年、放射能汚染濃度の高かったナロジチ区の農地再生のため、放射性物質の吸収力が高い植物を植えて土壌を浄化させる5か年計画「菜の花プロジェクト」を開始しました。現地大学と分析を進めるうち、菜の花から取れる菜種油には放射能は含まれないこと、放射能を含む搾りカスや茎葉はメタン発酵でバイオガスに生まれ変わることも分かりました。しかし、いざ土地を拡大して本格始動というところで、ウクライナで紛争が起こり情勢が不安定に。土壌再生計画は中断となりました。

しかしながら、ところを変え、菜の花プロジェクトは平成23年福島原発事故発生後、福島県南相馬市で今では100ヘクタールを超える敷地で実施されています。「ウクライナでも再開できる日を願っています」。河田さんや、現地サポート団体は、思いを新たに共有し活動を行っています。

リーダーズ・メッセージ

「現場に入って現場を知る」ということが、他人事ではない支援活動の始まりではないでしょうか。被災地から遠くなるほど伝わりにくい現地の状況を被災地の外の人にも正確に伝え、繋いでいくことも大切な役目だと感じています。



【未来へつなげる課題と夢と】

「ウクライナの原発事故から30年以上たった今も健康被害や心的被害など被災は続いています。風化させないためにも、次世代への活動の引き継ぎ、運営資金確保が目下の課題です」と語る河田さん。もちろん夢もあります。福島で菜の花プロジェクトを進化させ、菜の花の栽培地、搾油所、製油所、バイオ発電所、レストランを備えたファーム「油菜の里」を設立すること。「支援メンバーも現地の人も、アイデアを出し合うときはいきいきとしていますね」。県外からも人を呼び、現地の人とつながりながら学びと観光ができる場を創造

特定非営利活動法人チェルノブイリ救援・中部
Web <http://www.chernobyl-chubu-jp.org>
Blog <http://chqchubu.blog.fc2.com>



名古屋市は、今年10月にフランス・ランス市との姉妹都市提携1周年を迎えます。今回は、名古屋市公式代表団のランス市訪問、高校生交流についてご紹介します。



名古屋の家紋「シャチ」と、ランスの家紋「シャンパーニュのホルク」をイメージしたキャラクターです。

■姉妹都市提携セレモニー

河村市長をはじめとする名古屋市公式代表団は5月にランス市を訪問しました。ランス市とは、平成29年10月に名古屋市にて姉妹都市提携調印式を行いました。ランス市でも改めて式典を開催したいとの同市の意向があり、ランス市役所にて盛大な提携セレモニーが行われました。会場に入ると、ランス国立高等音楽院の生徒による「さくらさくら」の合唱で迎えられ、式典には多くのランス市民が参加していました。



▲有松絞りの着物の贈呈

式典では、両市長の挨拶のあと、「姉妹都市宣言」に署名をし、記念品の交換が行われました。ランス市から名古屋市へ、メダルとランスの職人が作った刀が贈呈され、名古屋市から

ランス市へは、有松絞りの着物と七宝焼きの写真立てが贈呈されました。

■高校生交流

名古屋市立高校生6名が7月28日～8月3日の7日間、ランス市を訪問しました。両市の提携のきっかけとなったランス美術館、フランスで活躍した日本人画家・藤田嗣治が建築したフジタチャペル、世界的シャンパーニュメゾン(メーカー)であるマム社、世界遺産のノートルダム大聖堂などを訪問したほか、高齢者施設でピアノ等のパフォーマンスを披露するなど地元の方と交流を楽しみました。



▲浴衣姿で歌を披露しました

名古屋姉妹友好都市協会の公式ウェブサイト・フェイスブックでは、姉妹友好都市にちなんだイベント情報などを発信しています。ぜひご覧ください。
Web <http://nsca.gr.jp/> Facebook [nagoya.sistercities](https://www.facebook.com/nagoya.sistercities) 検索